

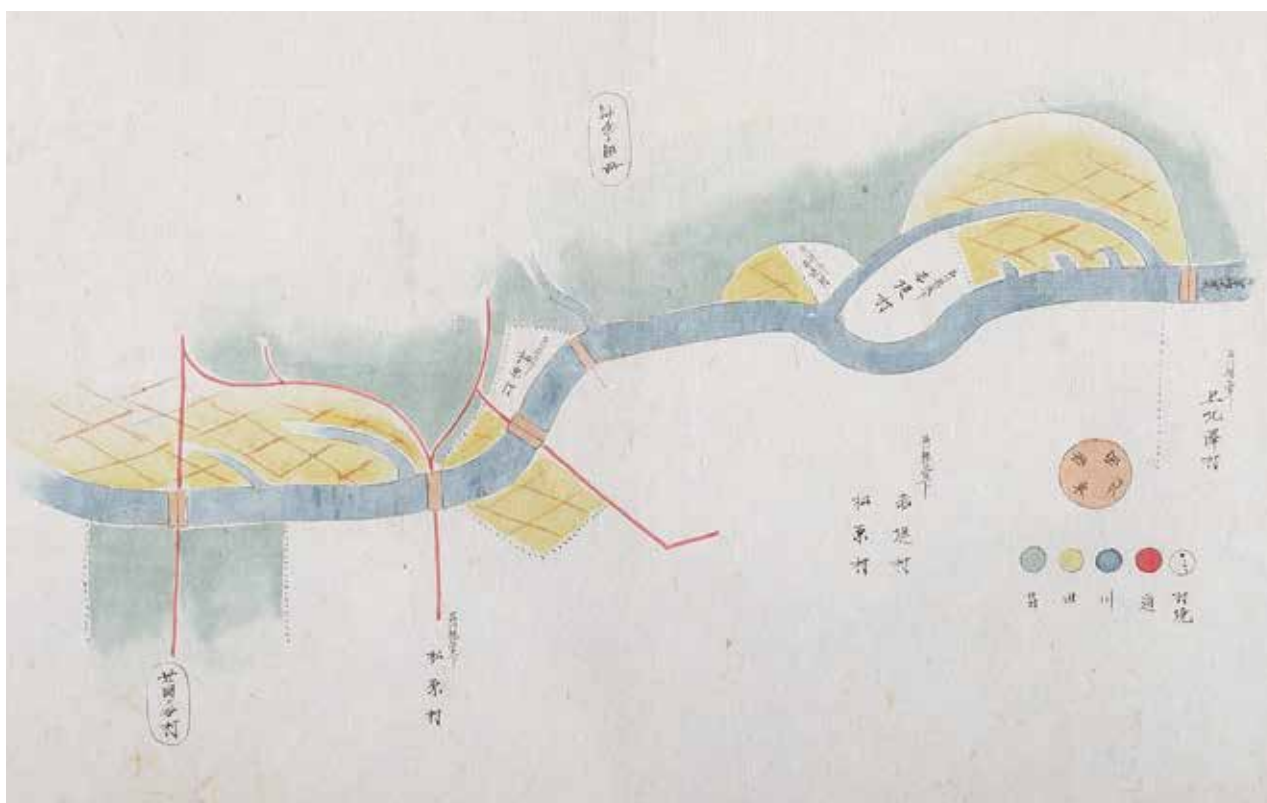
資料館だより

since 1967

令和 7 年度特別展

「世田谷の用水」

— 会期 令和 7 年 10 月 25 日（土）～ 12 月 21 日（日） —



世田谷領用水堀絵図（明治初期）

かつて世田谷区内には多くの用水路が存在しました。これらは、農業用水や生活用水として使用され、人々の生活と密接に関わっていましたが、現在、その多くは姿を消し、私たちがその存在を意識することはほとんどありません。

この展覧会では、主に江戸時代に開削された、六郷用水、玉川上水、そして玉川上水から分水された烏山用水、北沢用水、品川用水、三田用水を中心に、世田谷区内を流れていた用水の歴史を紹介します。大都市江戸の近郊農村であった江戸時代の世田谷において、用水は農業のために欠かせないものでした。しかし、近代になり宅地化が進むにつれ、徐々に農業用水としての需要は低下し、土地整理事業などの過程で排水路として整備されるようになりました。生活用水としては、近代水道の敷設も強く望まれるようになりました。

このように、用水の歴史的展開を追うことは、単に用水そのものの歴史にとどまらず、世田谷の歴史を見ることにもつながります。この展覧会が皆様の世田谷の歴史への理解を深める一助となれば幸いです。

本稿では、特別展「世田谷の用水」の概要と見どころを紹介します。

第一章 用水の開削

世田谷では、16世紀末から17世紀にかけて複数の用水路が開削されました。六郷用水は、六郷領（現在の大田区）の農業用水として開削されましたが、のちに世田谷での利用も認められるようになります。承応2年（1653）、江戸の上水として開削された玉川上水からは複数の分水路が引かれ、世田谷の村々もその恩恵を受けました。この章では、六郷用水、玉川上水をはじめ、世田谷と関わりの深い用水路開削の歴史を概観します。



玉川上水木樋（江戸時代）

寸法：58×56×458cm

新宿区四谷から出土した木樋。玉川上水は、四谷大木戸までは開渠で水を通したのに対し、江戸市中は主に地下に埋設した石製や木製の樋によって給水した。



世田谷勤事録 卷一 享和元年（1801）

元禄4年（1691）に品川用水の大規模な改修工事が行われた。これ以降、世田谷では品川用水を農業用水として使うことを禁じられ、水路沿いには、用水の土手を壊したり、水を盗み取ったりしてはいけないと記された写真のような高札が立てられた。



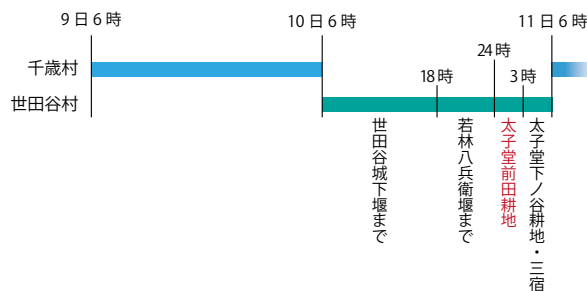
上流より見た烏山用水の取水口
（大正～昭和前期）

東京都水道歴史館所蔵

第二章 用水の維持管理

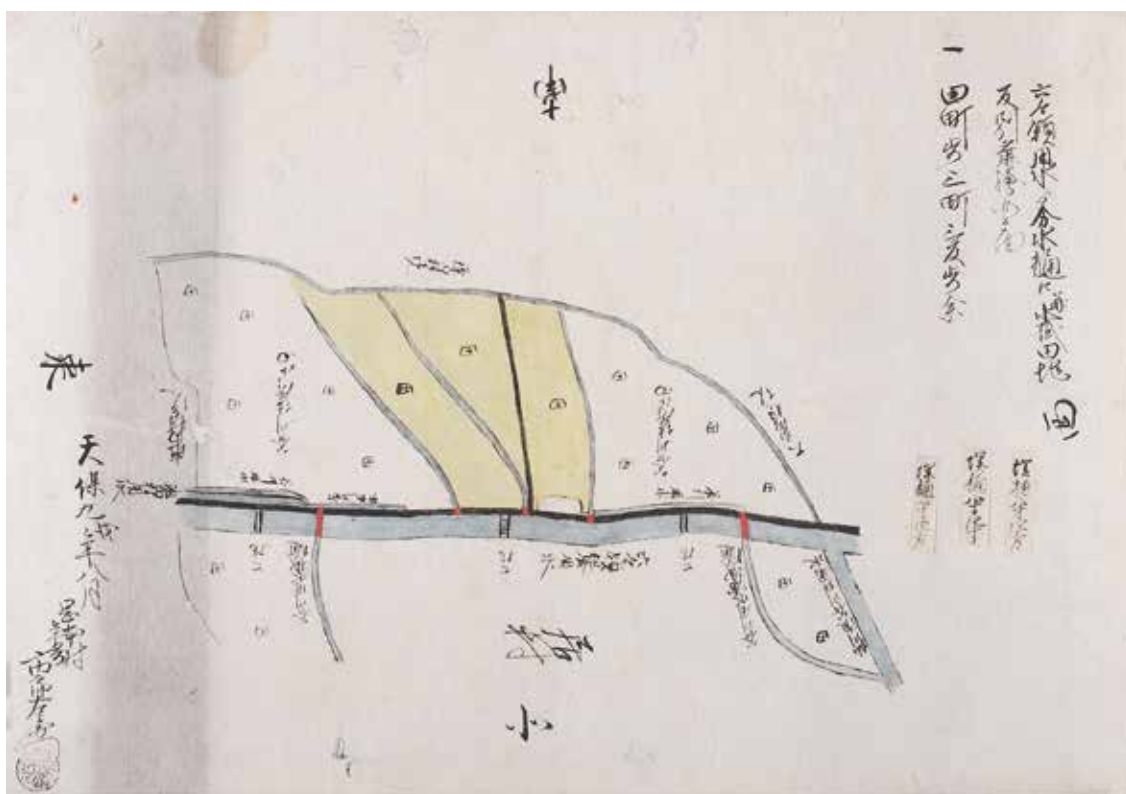
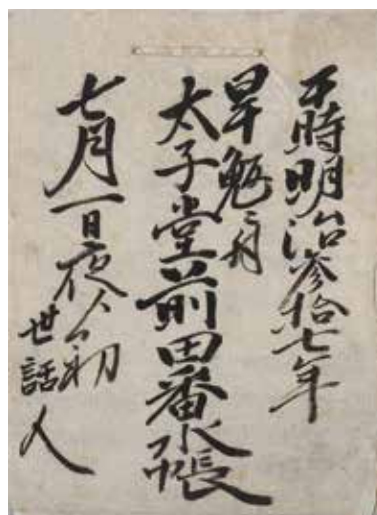
江戸時代の世田谷におけるもっとも大きな用水需要が農業用水（灌漑用水）でした。用水を利用して人々は、水路や用水堰の修繕や堀浚いなどの維持管理を共同で行いました。また渇水時には、順番に取水するなどの工夫をしましたが、水路の上流と下流との間で水争いがかかることもしばしばありました。この章では、用水の維持管理や用水利用をめぐる慣行や争いについて見ていきます。

明治 37 年の番水概要図



干越につぎ太子堂前田番水帳 明治 37 年（1904）

日照りが続いたため、烏山用水を使用していた太子堂の前田耕地の地主たちは、7月1日から7日にかけて、時間を決めて配水する番水を行うことを決定した。7日になっても日照りは続いたため、今度は太子堂だけでなく、世田谷村として、烏山用水の上流にあたる千歳村と相談の上、9日は千歳村、10日は世田谷村といったように、番水を行うことになった。世田谷村に配分された日の中で、24時から翌午前3時が前田耕地の時間となっており、番水の日時は重層的に定められていた（右上概要図参照）。



六郷用水より分水堀割口 并 水掛田地反別絵図より「岡本村」天保 9 年（1838）

六郷用水は六郷領の灌漑を目的に開削されたが、享保 10 年（1725）以降、世田谷での利用が公認されるようになった。岡本村では、3か所の埋樋によって六郷用水から取水し、図上黄色に塗られた田を灌漑した。

第三章 様々な用水利用と宅地化の進展

玉川上水や六郷用水、品川用水などは、いずれも飲料水や農業用水として開削されましたが、時代が下るにつれ、農業用水としての需要が減少し、様々な用途で利用されるようになります。そして世田谷の宅地化が進展するとともに、排水路とされる用水も見られるようになりました。この章では、灌漑以外の多様な用水利用のあり方と、町の変化に伴う用水路の変容について取り上げます。

水車の水輪と万力（歯車）

灌漑用水として開削された用水路に、時代が下るにつれて水車が設置されるようになった。水車は、水流によって水輪を回転させ、その回転を万力と呼ばれる歯車を複数組み合わせることで、様々な動力に変換する。江戸近郊農村では、江戸時代後期になると、水車によって臼や杵を動かし、精米・製粉を行う水車稼ぎが広く見られるようになった。

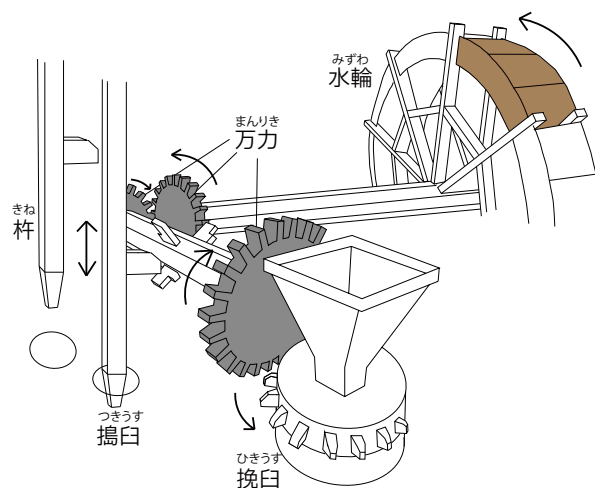


万力 寸法：直径 71 × 奥行 18cm



水輪【部分】民家園係所蔵

寸法：幅 92 × 長 117.5 × 高 33.5cm



水車模式図



改修された烏山用水

（『整理地の展望』

昭和 12 年 / 1937）

近代になり宅地化が進展するとともに、土地区画整理事業が実施された。その過程で、用水路の改修工事が進められていった。

（学芸員 角和裕子）



決戦生活記録（其一、二）

「去る十二日家族疎開をし、東京には自分一人残留し愈々文字通り決戦生活に這入った。」昭和20年（1945）4月14日、東京府立第八中学校（現都立小山台高等学校）教諭の中田禮吉先生（※資料1参照）は、ほっとしていました。空襲が激しくなる中、妻子を妻の実家宮城県刈田郡白石町（現在の宮城県白石市）に疎開させることができたのです（※資料2参照）。世田谷区大原町の自宅に戻った中田先生は、戦争に立ち向かう覚悟を固め、「決戦生活記録」と題した日記を書き始めました。8月に招集されるまでの中田先生の毎日の様子が目に浮かぶような日記を、

娘さんの^{とちやけいこ}栃谷桂子さんから寄贈していただきました。戦時中の区民の貴重な記録として、保管していきます。今回、当館の新収蔵資料として紹介いたします。



資料1 中田禮吉先生

資料2 都市疎開ニ伴フ地方轉出証明書
昭和20年3月26日

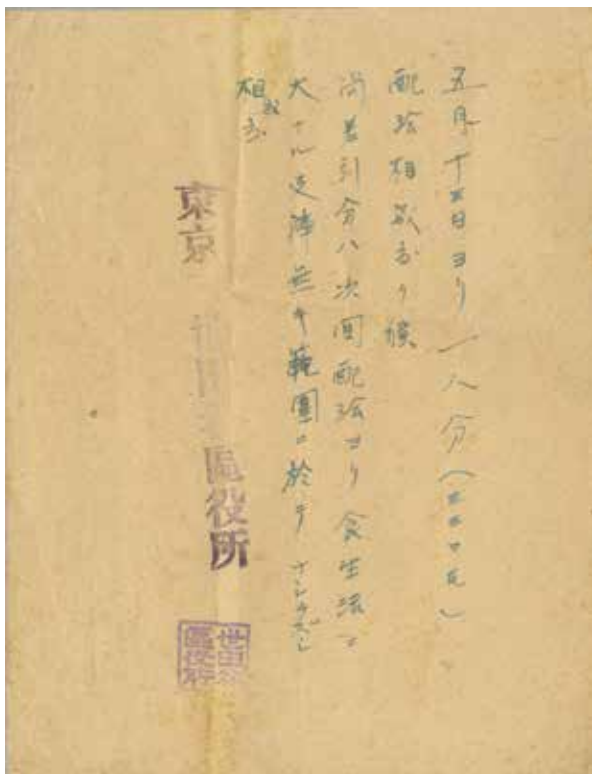
【府立第八中学校】

中田先生の勤務校、東京府立第八中学校は大正10年（1921）に創立されました。府立中学8番目

の学校として、品川区に開校しました。現在の都立小山台高校です。戦前の東京府立旧制中学校は一中（現都立日比谷高校）から二十三中（現都立大森高校）まであり、開校順にナンバーが付いていました。八中は、「克己・親和・勤勉」を校訓とし、全人教育を理想としたのびのびとした校風の学校でした。昭和10年（1935）から夜間部を併設し、夜間の授業も行っていました。中田先生の日記の中にも、夜間の授業の様子が何度も出てきます。中田先生は昭和20年4月から23年3月まで在籍されていました。担当教科は物証（生物以外の理科系科目）でした。

【日常生活】

中田先生の毎日は、悪化する戦況との戦いでした。教員として生徒のことを学校のことを考え、家では家族のことを考え毎日を過ごしていました。当時の学生は勤労奉仕にかり出されていたから、日中は学生たちが働く工場へ視察に行き、夜間には定時制の授業をこなしていました。また「疎開やもめ」と自嘲し、仕事以外は自由に動き回れる時間を利用して、食料を調達して自炊し、隣近所の心配をし、焼夷弾の火を消し、壕を掘りました。もちろん遠く離れた家族のことも心配でした。空襲による交通網の崩壊で通勤電



資料3 配給が1人分になったとの通知

車でさえ運休が続く中、時間ができると家族に会うために苦労して切符を手に入れ、混雑する長距離列車に乗って白石に向かいました。そうした中で、家族が減ったため配給も減らされ、食生活はますます苦しくなっていました（※資料3参照）。空襲も激しさを増していき、運命の5月24日「東京山の手の大空襲」を迎えたのです。

【東京大空襲】

連合国軍の東京への空襲は、ほとんどがB29爆撃機によるものでした。昭和20年を中心とする東京に対する空襲は、その内容から次の3期に分けることができます。

第1期は、昭和19年11月24日から20年3月5日まで。主に昼間、高所から目視によって軍事施設や軍需工場を標的に行われました。

第2期は、昭和20年3月10日から同年5月中旬まで。B29が夜間に超低空で東京上空に侵入して、無差別に工業地域や密集地域に焼夷弾を投下しました。特に3月10日の大空襲によって、下町は大きな被害を受けました。



資料4 罹災証明書 昭和20年5月26日

第3期は昭和20年5月下旬から終戦の8月15日まで。この期間に東京都心はほとんどが焼け野原となりました。世田谷が大きな被害を受けた5月24・25日の空襲はこの時期に当たります。

中田先生の大原町の自宅は、24日の空襲では焼けずに残ったものの、25日の空襲で全焼してしまいました。24日空襲警報が発令された直後は、「さあ、来るなら来いという準備と覚悟ができた。子どもたちが疎開しているので全く落ち着いた気持ちである。」と構え、空襲の様子を「焼夷弾は、渋谷・目黒に白糸の滝のように降り注ぐ。」と冷静に観察していました。しかし自宅近くに着弾した爆発で、火の粉が庭に降ってくる状況になると、「ついに最悪の場合が来たのである」と覚悟を決めました。この日はなんとか消火し、被害を最小限に食い止めたが、翌25日深夜の再度の空襲で大原町は火に囲まれ、いよいよ消火を諦め避難することになりました。迫り来る業火から逃げ、甲州街道の路上で一夜を明かした中田先生は、自宅のことが心配になり「噴火口を歩く思い」で焼け跡の中を家に戻りました。そこで見たものは、門だけ残り全焼した自宅でした（※資料4参照）。

気落ちした中田先生の姿が目浮かぶようです。そんな状況でしたが、うれしいこともありました。「徐々に壕の蓋をあげてみた。全く無事であった。」避難する前に蓋をしておいた防空壕の中に入れておいたものが無事だったのです（※資料5参照）。少し元気が出た先生は、新宿まで行き交通状況を調べることにしました。道中、空襲による惨状を目の当たりにし暗澹たる気持ちになりながらも、これからの生活について考えるのでした。

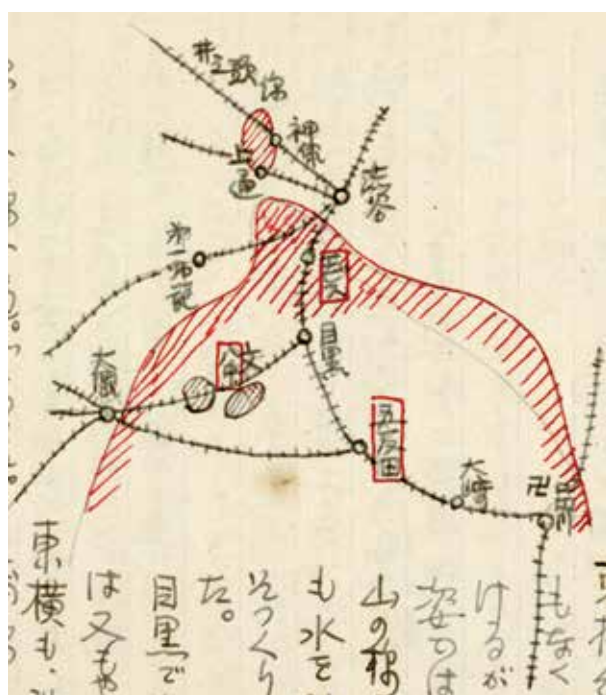
【交通事情】

中田先生の職場である府立第八中学校は、目蒲線の武蔵小山駅に隣接していました。大原の自宅からの通常の通勤ルートは、京王線代田橋駅から新宿駅に出て、省電（現在のJR山手線）で目黒駅まで行き、目蒲線に乗り換えというものでした。しかし空襲もあり、日記を書き始めてからこのルートで出勤できたことは数えるほどしかありませんでした。鉄道が使えないときは歩いて学校に通いました（※資料6参照）。

また当時の長距離列車は、次のような状況でした。



資料5 庭の防空壕の絵（中田先生作）



資料6 焼失箇所（赤線）の地図（中田先生作）

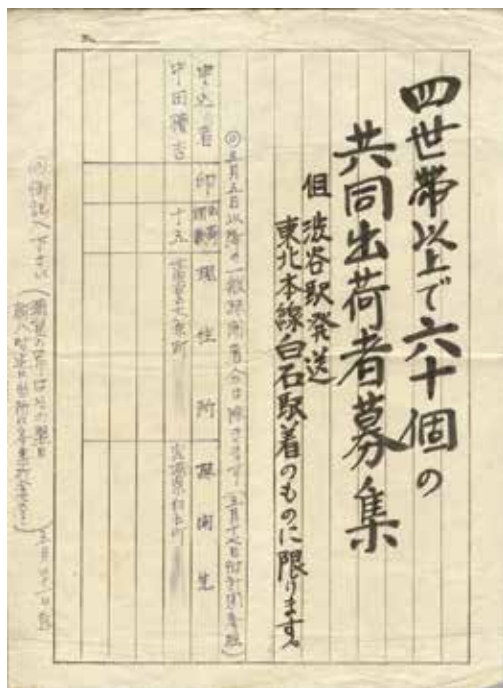
「貨物列車を最大限に増発する必要から、旅客列車が削減された。旅客輸送が逼迫すると、旅客列車の混雑は異常な物となった。また1944年4月以降、一般の旅行に警察官の証明が必要となり、手続きが煩雑な上に制限が加えられ、輸送体制は混乱を極めた。こうした状況に加え、連合国軍による空襲が開始され、鉄道は軍関係施設と並び攻撃の目標とされた。空襲により、国鉄だけで延1,600kmの軌道が破壊

された。」(『交通運輸の発達と技術革新』原田勝正 東大出版 1986 年)

家族のことが心配で何度か白石を訪れていますが、切符を手に入れる困難さや列車の混雑について、日記に詳しく書かれています。

【荷物の輸送】

5 月 25 日の空襲で自宅は焼けましたが、奇跡的に庭にあった防空壕の荷物は無事でした。この荷物を妻子の疎開先である白石に送ろうと先生は奮闘します。当時の貨物輸送は、旅客郵送同様大混乱でした。まとまった数の荷物を特別扱いの配送にしてもらうため、一緒に荷物を送る方を募るチラシも作りました(※資料7参照)。様々なコネを使い、やっと荷物を発送した時はほっとしたことと思います。



資料7 共同出荷者募集チラシ(中田先生作)

【ふるさと】

中田先生の故郷は静岡県榛原郡萩間村(現在の静岡県牧之原市)でした。戦況が厳しくなり、なかなか切符も手に入らない中、7月に勤務校の助手を連れ

て帰省しました。「父母の家に着いたのは午後四時であつた。白米飯に卵のおつゆに満腹し、先ず、田舎に落ち着いた感じをしみじみと味はふ。屋敷を一廻りして思い出と、田舎の豊かさに浸った。」豊富な食べ物に助手たちも大満足し、先生も故郷の良さを実感しました。当時の東京と地方の食糧事情の違いが感じられる記録です。

【招集】

故郷で休日を楽しんだ先生でしたが、東京に戻ると「赤紙」が届いていました。「心は既に、鏡のように澄んでいる。愈々来たる物が来たという淡々たる気持ちである。」と記した後、「これで日本男子として、君の為、国の為にご奉公出来るかと思うと、実に感激の血潮が脈々と五体を力強く流れるのを覚えた。」と言っています。8月に甲府の部隊に合流することになり、送別会等で多忙な毎日を送りながら荷物整理をした後、家族に会いに白石に向かったのです。

束の間、家族との再会を喜び、そして別れを惜しんでから、入隊のため甲府に向かったところ(8月1日)で日記は終了しています。

戦後、復員した中田先生は教職に戻り、都立高校の教員として勤務が続けられました。

昭和62年(1987)12月に78歳でお亡くなりになりました。

※原文引用箇所のルビは筆者が追加したものです。

【参考資料】

『東京大空襲・戦災誌 第2巻』東京大空襲を記録する会 1973

『日本空襲記』一色次郎 文和書房 1972

『創立六拾周年記念誌 東京都立小山台高校』1984

(学芸研究員 渡辺静雄)

資料館だより No. 82

発行年月日 令和7年10月24日

編集発行 世田谷区立郷土資料館

〒154-0017 世田谷区世田谷 1-29-18

☎ 03-3429-4237 FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No.2406